

学びとは何か

— <探求人>になるために —

今井むつみ 著

著者の今井むつみ氏は、認知科学、言語心理学、発達心理学の専門家である。新しい学習指導要領が検討された中央教育審議会等でも話題となった「認知科学」、「認知学習」の第一人者である。認知科学の立場から、「学び」とは探求のプロセスであると述べている。断片的な「知識」を塗り重ね、知識の断片を積み重ね、膨張させること（「知識ドネルケバブ・モデル」と呼ぶ）を繰り返しても「新しい知識」は創造されない。つまり、「学び」とは言えない。また「生きた知識」は常にダイナミックに変化し、新しい要素が加わることによって絶え間なく編み直され、変化していく生き物のような存在であり、自分で発見し、主体的に解釈する知識のシステムを構築する必要があるとしている。

人は誰もが「自分で学ぶ力」を持っている。そのことをもっともストレートに教えてくれるのが、子どもの母国語の学習である。子どもは母国語を学習するとき、文法や語彙を親や先生に直接教えてもらうことはない。子どもが母国語を学習するとき発揮する能力は、まさに「自分で問題を発見し、考え、解決策を自分で見つける」という「主体的な学び」そのものである。「主体的な学び」が教育現場でキーワードになっている昨今、子どもの母国語の学習の仕組みを理解することは、「自ら学ぶ」がどういうものなのかを私たちが考える上で、大きなヒントになる。このように、外から教えてもらうもので無く、自分で探し、身に付ける知識こそが「生きた知識」であるとしている。

「記憶力がよい」ということは、もともとは

意味のなかった情報に意味づけをする能力だったり、必要な情報を見極めてそれを細かく観察する能力だったり、目の前の情報をすでに頭の中に持っているデータベースと関連づけて分類する能力だったりする。また、私たちは日常で起こっている何かを理解するために、常に行間を補っている。実際には言われぬことの意味を自分自身で補いながら、文章、映像、あるいは日常的に経験する様々な事象を理解している。行間を補うために使う常識的な知識、これを心理学では「スキーマ」と呼んでいる。

「天才」には才能の有無を決定する「〇〇の遺伝子」というものはなく、あらゆる能力は、多くの遺伝子と環境要因、成熟要因が複雑に絡み合うところに出現する。天才と呼ばれる人たちは、子どもの時から少し目立つ特徴に、周りの大人が反応してさらにそれを助長する、というこの繰り返しによって、雪だるま式に長い時間をかけて作り上げられていくものである。天才や「超一流の達人」と呼ばれる人たちが「創造性」を発揮するのは、臨機応変に状況に応じた自分独自のスタイルで問題を解決できる能力と飽くなき向上心であると分析している。

新しい学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の必要性が述べられている。「主体的に学ぶ」とは、具体的にどのようなことなのか。これに関する教育関係の書籍も数多く出版されているが、論理的に論じているものは多くない。先の見えない社会に生徒を送り出すこれからの教師の在り方として、こうした「学び」の理論や仕組みを理解し、それをバックボーンとして教室における具体的な教育活動に反映させることが求められている。このようなことが「創造的な教育活動」につながるのではないだろうか。

（岩波新書、230頁、800円＋税）（池守 滋）